

琉球大学学術リポジトリ

1.

「戦後」沖縄教育開始時の一動向に関する試論的考察－『石川学園日誌』及び『記録簿』を中心に－

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部音楽科 公開日: 2011-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿波根, 直誠, Ahagon, Chokusei メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20077

1. 「戦後」沖縄教育開始時の一動向に関する試論的考察

—『石川学園日誌』及び『記録簿』を中心に—

琉球大学教育学部教育学科
阿波根 直 誠

I. はじめに

「石川学園」といえば、現在の石川市立城前小学校の前身であり、同小学校の校門右手の校庭に、「戦後沖縄教育発祥之地」と鮮やかに刻まれた記念碑が建立されていることは周知のとおりである。〔図1.〕この学園の発足が1945年5月7日といわれているから、その時期は、まさに沖縄戦たけなわの頃であったといっても過言ではない。首里にあった第32軍の司令部は依然健在で、旧那覇北方の天久台、とくにあのシュガー・ローフ・ヒルの日米熾烈な攻防戦が展開する直前でもあり、凡そ西方は安謝、中央は沢岬、東方は小波津の線に接近して壮絶な戦闘が続行されていたとみられる。〔図2.〕〔図3.〕

それは沖縄戦の組織的な戦闘が一応終了したと言われる6月23日の凡そ40余日も前であり、また日本の敗戦時（8月15日）の約3ヵ月余も前のことであった。しかし、同じ沖縄本島でも北部方面はまだ掃討戦が続いていたと思われるし、宮古、八重山方面では、むしろ、米軍の「上陸前」とでもいうべき時期であったとみられる。したがって、このことから推察されるように、時期的にも、また、心理的にも軍民を問わず、極めて微妙な状況の中において「石川学園」の発足をみたと考えられよう。

小論で、敢えてこの時期を選んで考察の対象とした理由の一つは、沖縄の、いわゆる「戦後」教育が制度的に辛うじて確立していくのが翌1946年の1月からであり、その制度化される前の複雑微妙な、あるいは、混沌とした教育状況の実態面の把握に多少なりとも迫ってみたいからである。そこで、アプローチのしかたにもいろいろ考えられるが、試みに、小論では、現在の城前小学校に保存されている『石川学園日誌』（以下『日誌』と略称する）〔図4.〕と『記録簿』の分析を中心として、最も初期のころ、5月10日（日誌はこの日より記述開始）から10月22日（児童数の急増で、この日より分離する）までの約5ヵ月間を対象にして究明を試みたい。しかし、今回は、諸要因の中から僅かに限定して検討を進めるため、「戦後」沖縄教育の発足時の状況の把握とはいえ、やや部分的、一面的に墮することは否定できず、その点でも大きな制約をもっていることを予めお断りしておきたい。思うに、「戦後」の各地域における学校の開設時の動向については、一般に普遍化は不可能であろうし、むしろ、当時としては各学校によって各々異なった態様があったのではないだろうか。しかし、反面、やはり沖縄戦とのかかわりで、実質的には共通する点もそれなりに存在したものと思われる。「戦後」教育の原点を模索し、追求する所以である。なお、小論で「戦後」と括弧を付したのは、上述のように、とくに沖縄の場合、必ずしも宮古、八重山等は勿論、日本本土と同列には位置づけ難い微妙な一時期があったと思われるからである。ただし、戦禍の軽重を意味するものではない。

本節の最後に、『石川学園』に関する先行研究について若干言及しておきたい。単独の纏まった論述としては、曾根信一氏の「—まだ銃声が聞こえる中で始められた戦後最初の学校—石川学園の記録《山内繁茂氏を囲む人々》³⁾」がある。曾根氏は直接、山内氏をはじめ、当時の関係職員児童生徒にも接して史実の確認そして発掘に意を注がれ、全体として記録性に富み、貴重な資料ともなっている。一方、部分的ながらも、それぞれの視点から言及したものはかなり多く、上沼八郎⁴⁾、森田俊男⁵⁾、川井勇⁶⁾、鹿野政直⁷⁾、榊原昭二⁸⁾、大内義徳⁹⁾といった諸氏の重厚な論著などでも論及されており、注目される。ただ、その殆どが、概ね『琉球史料』第三集『石川市史』¹⁰⁾そして聴き取り調査等に拠っており、『日誌』そのもの

の詳細な分析は余り見当たらないようである。したがって、これらの貴重な先行研究を踏まえつつ、今少し日誌類の分析面にもこだわりつつ検証してみたいというのが筆者の趣意であり、「戦後」教育史に関する実証的な研究の一つのささやかな試みでもある。

II. 『石川学園日誌』及び『記録簿』の資料としての意義

これらの『日誌』及び『記録簿』を作成した原資料ともいべき用紙そのものからして、いわゆる戦前の「国民学校用」のノートであり、それを利用せざるを得なかったところにまず当時の「紙」の事情が偲ばれよう。その時点においては、戦禍のため、民間側には用紙類が殆どなく、米軍からの支給もまだ余り期待できなかつたと思われる。したがって恐らく辛うじて戦禍を免れて、避難壕か廃墟と化した民家の瓦礫の中などから拾いあげられたノートではなかつたらうか。地域によっては、それすらなく、米軍の食糧などを包装した紙袋などを使用してノートに転用した例もあつただけに石川学園の日誌類はかなり恵まれた方であろう。ただ、文字の書き方に若干の乱れが看取されるのは、却って、当時の物心両面そして教育状況の不安定さを如実に示しているようにも思われる。それだけに、よくも不断に書き続けたものだと、とにかく、担当した教師たちの格別の努力に、まず敬意を表したい。

両者は、その時期の教育動向及びその周辺の事情を把握するのに相互補完的な意義を持つものとしても注目される。米軍占領初期、あるいは、いわゆる「戦後」最も早いと言われる石川学園の動向を知る資料としては極めて画期的、且つユニークな資料としての意義もあろう。さらに付言すれば、この日誌に対応した期間中、特に初期の頃は雨天の際には授業は休業が多いにもかかわらず、日誌の記述は行われており、土曜日は勿論、日曜日と言えども殆ど記述されていることに、当時の学園の独特な事情の反映をも看取されよう。

ちなみに、小論では、琉球大学図書館所蔵の複写資料を使用した¹²⁾が、原典は石川市立城前小学校に保管されており、必要に応じて、時々、筆者も複写資料の不備な点を照合するため、同小学校を訪ね、校長先生（伊波 久彌氏）はじめ職員の方々にお世話になった。その際、校長先生に尋ねられた一件、すなわち、この日誌類の保管方については、県内の他の諸学校の場合も同様で管理者の最も頭を痛めることの一つであろう。歴史的に意義が大であればある程、関係者、団体、機関による共同審議等により、より妥当な保管方法を考えてもよい時期に来ているのではないかとと思われるが、当面はその場でないので、これに関する論議は別の機会に譲りたい。

III. その背景としての米軍占領教育政策の素描

『石川学園』について考察をすすめる前に、その背景として、沖縄における米軍による占領教育政策の一端について、直接この学園にもかかわると思われる面についてのみ若干取りあげて検討することから始める。

周知のとおり、米軍が、沖縄上陸のかなり前から占領行政についてそれなりの準備をしていたということはこれまで多くの論著が指摘するところで、米国の若干の大学における軍政要員の養成や『民事ハンドブック』の作成等もその注目すべき例であろう¹³⁾。とは言え、本土の占領行政に比べ、必ずしも本格的というか、徹底したものではなかつたということもまた事実であろう¹⁴⁾。尤も、米軍の作戦面で当初予定していた台湾侵攻が1944年秋ごろ急遽沖縄上陸作戦[いわゆるニミッツ (Chester W. Nimitz) 提督の指揮下にあつてアイスバーグ作戦[Operation ICEBERG の展開]に変更したことも大きな要因の一つとみられよう¹⁵⁾。いずれにせよ、占領行政面で多少蔭の薄い教育の分野にしても、やはり米軍は例の『民事ハンドブック』等のマニュアルの外には沖縄上陸以前において僅かの応急策しか持っていなかつたと解すべきであろう¹⁶⁾。

たとえば、第10軍 [バックナー中將 (Lt. Gen. S. B. Buckner)] は Operational Directive Number 7 for Military Government of the Commanding Tenth Army [いわゆる GOPER] なる指令を沖

繩上陸の凡そ3カ月前の1945年1月6日に出していることに注目したい。それによると、占領下、教育面では、応急手段的な(Emergency)教育的そしてレクレーショ的な企画が採用される、とされ、状況が許せば、もっと本式の、且つ、恒久的な教育体系が制度化される、というものであった¹⁷⁾。さらに、その後、いわゆるテクニカル・ブルティン(Technical Bulletin)と称される注目すべ指令が1945年2月5日に発せられていることは極めて重要である¹⁸⁾。

その教育部門をみると、(a) 学校の閉鎖、(b) 重要な学校財産に関する報告(書)を確保すること、(c) 子供たちのために必要な応急計画(Emergency Program)を用意すること、(d) 他の教育活動の整備、等があった。紙幅と論旨の都合で、ここでは(c)について主に取りあげておきたい。この(c)については、まさに上記の作戦指令第7号が踏まえられていると思われるが、その教育の応急計画の概要は次のとおりである。

- (1) その計画は住民によって組織され実施される。この計画を引き受けて責任を持って遂行するために各地域において教育経験をもった三人またはそれ以上の委員が任命され、そして軍政府の諸規則に合致するよう確認する。
- (2) 上級軍政府将校によって指名された軍政官が全般的な監督権を行使し、種々の地域計画を調整する。彼らは教育委員会委員を任命し、計画を組織するためにアドバイスを与えると共に支援をする。また、彼らは諸規則が遵守されているかどうかを確認するために適切な調査を行う。さらに、教員の宿舍、校務、配給そして必要な資金面などに対する援助を行う。
- (3) 日本の教育体系における全ての国家主義的性格のものは禁止される。「修身」(Shushin) または「道徳」(Moral)、神道の儀式そして東京に向かって最敬礼をするような作法は禁止される。使用する如何なる教科書類からも異議のある箇所は削除される。
- (4) その計画は、民間収容所において最初に初等学校(Elementary School)の学年齢の子供たちに実施される。また、その計画は条件が整い次第、年長の子供たちや収容所外の子供たちをも含める。その計画の教育部門は基本的には読、書、算に限定される。また衛生、娯楽そして職業教育に関連する他の活動は、特に初期の段階においては至上ではないにしても重要ではあろう²⁰⁾。

その後、米軍は沖縄本島上陸時に「米軍占領下の南西諸島および周辺の住民に告ぐ」と題する米国海軍軍政府布告第1号を発令して日本政府の行政権行使を停止し軍政府樹立を宣言した。ニミッツ布告である。学園の発足前に、少なくとも以上のような諸指令布告類が発令されていることをまず確認しておきたい。したがって、学園発足に際して上の諸令達類のいずれの項目に依拠したか等について具体的な比較分析が必要であるが、今回、この面については割愛し、別稿を予定するものである。ただし、後節において、部分的に取りあげるに留めたい。ちなみに、5月7日の石川学園発足後、他の地域でも陸統と学校の設立がみられるようになるが、その時点からは、むしろ、1945年5月15日に通達された軍政府指令第16号に拠ったのではないかと思われる²¹⁾。なお、この第16号も極めて重要な指令である。しかし、内容的には上記のテクニカル・ブルティンに則ったものと解され、殆ど類似するとみられるので詳細については割愛する。

それでは、果して、これらの通達・テクニカル・ブルティン等を背景として、当面の「石川学園」はどのようにして発足したのか。まず、その契機ともなった米軍側とこれに対応した学園長の山内繁茂氏の動向について触れることにしたい。

VI. 「石川学園」発足直前の動向

「石川学園」の発足が1945年5月7日ということは、前にも述べたように、比較的一般によく知られていることである。そこで、この学園開設に至るまでの経過について、次に示す山内氏の回想記の中から取りあげて検討を進めてみたい。

今から二十年前の4月25日に名護喜瀬の山から家族とともに米兵につれられて石川市に収容されて

から、いつかの夢が現実の姿となって、東恩納へ、伊波へと学校建設等の用件で行ったり来たりしながら、夢の不思議さに感嘆しました。石川市に収容された頃は人口三千人位でしたが、そのほとんどは、老人婦女子、子供でした。壮年の男はカンパンと言って鉄条で囲って一般と隔離されていました。ほとんど着のみ着のままで、食料も不足がちでした。家族と離れた老人や病人が多く、米兵にタバコや菓子をねだったり、家族をさがす為等で、道路一ぱいに集まり、車が駐車するとたかり交通の邪魔にもなり、作戦の支障をきたすと言うので 軍当局は子供を適当に隔離したいと考えていたようです、たまたま収容される時私は職業も氏名も偽らずに申告してあったので地区隊長アーレン大尉から子供収容所を作るようにと依頼されました、いつ終結するとも予想の出来ない戦時中子供をこのまま野放しにしてはおけない、何とかならないかと思っている時でしたので、銃後にいる者の務、□あるとして、学校を開設することを承諾しました、(すべて原文のまま＝引用者注²³⁾)

さて、上記の山内氏の所言の中には、重要な要因が多く含在するが、子供が道路に溢れる、したがって、交通や作戦の邪魔になる、などの実態と米軍側の見解そして「子供収容所」をつくるように、とのアーレン大尉の要望なども注目に値いしよう。一方、山内氏の別の機会における証言では、「子供収容所」ではなく、「幼稚園」であった、とされている²⁴⁾。後者の「幼稚園」について、山内氏はその「経営困難ナルヲ察シ」、これを拒絶して、結局、山内氏のもっと自由にさせて欲しいとの要望が米軍側に受け入れられたが故に承諾したと言われる。アーレン海軍大尉は、山内氏が4月24日に収容されて数日後テント小屋に通訳の小谷二世と共に訪ねて来たと言われるが、しかし、アーレン大尉については、曾根氏も「彼が収容所長だったのかどうか、その地位は今もってはっきりしない」と述べている。「ミシガン州の出身で非職業軍人であった」と²⁸⁾と言われるが、彼については今のところ掘るべき資料が少なく余り明確ではない。ところで、学園開設の前に、石川収容所では米軍政府の諮詢に応じてすでに委員会が設置されていた。委員長は初代石川市長の屋我次郎氏で、初等教育部、社会教育部、生産部、集荷部、配給部、救済部、衛生部、治安部、人事部、連絡部の10部門の構成となっていた。当時、山内氏は初等教育部長の職に就いていたのである。²⁹⁾

アーレン大尉と山内氏の先述の対話が何時行われたのかは明確でない。ただ、山内氏の収容後数日との証言から、ほぼ4月の末頃と推察される。一方、学園設置にあたっての敷地については、「地番でいうなら284～286番地の住宅地の、空襲による焼け跡を利用した」と³⁰⁾言われ、[図5.]後身である現在の城前小学校へ移転したのは、その年の6月24、5日以後のようである。³¹⁾ところで、その敷地での開校に先立ち、いつ頃から整地作業が始まったのか、山内氏によれば、「カンパンから労務者230名をつれ出し、民間住宅地を地均し、石川学園の名で発足しました³²⁾」という。これに関連して、運動場整地作業の許可を与え、日付けまで明示した米軍側の資料の一つが注目されよう。すなわち、地域の路頭に迷う子供達を排除するのに役立てるため、石川地区の「B」チームの司令官は早くも1945年5月1日に、運動場(Playground)の建設を許可した。その司令官は150人の米軍人と沖縄側の人夫に運動場を建設するために作業をさせた³³⁾、というのである。思うに、いよいよ、上陸以前において予測された教育関係諸法規の実施に入ることになるが、しかし、いくら激戦中とはいえ、「学園」が5月7日に全く突如として設立される筈もない。その点、上の記述は相応する場所(敷地)の確保や整地等の問題がそれ以前にあったことを示すものであろう。ただし、たとえば、整地作業に従事した人数や作業員の実態等に関しては山内氏の証言と若干の相違をみせていることも確認しておきたい。

以上、「石川学園」発足の背景として幾つかの要因を抽出して多少の検討を試みた。勿論、まだ多くの要因や史実の確認等、究明すべき点を残していることも事実である。これについては、また別の機会に検証を試みたいと思う。以下に、石川学園の開設後の若干の特色を、副題に示した『石川学園日誌』と『記録簿』を中心に吟味してみよう。

V. 「石川学園」の特色

『石川市史』中の城前小学校沿革誌によれば、「5月7日、沖縄戦たけなわの頃、米軍戦時教育係将校海軍少佐ハンナ博士指導のもとに創立、戦後における沖縄教育発祥の地である」と記述されている。ハンナ(当時)大尉がこの石川学園の創立にかかわったことを示しているが、その具体的な面については詳らかではない。

ともかく、学園長の山内繁茂氏は、すでにしばしば引証されるように、「校舍ナク教科書、学用品ナク只燃ユルガ如キ教育愛ノミニテ、顔色青白ク蔽衣蓬髪ノ栄養不良児ヲ如何ニ養護スベキカニ苦心セリ³⁵⁾」と言われる。恐らく、先に指摘したように、整地された場所に、いわゆる「青空教室」同然の状態ですタートしたのではないかと思う³⁶⁾。開校当日の児童数は790(男児395、女児395)名で4年生以下とされ、職員数20(男子教員9、女子教員11)名、その他「給仕」1名、「小使い」2名、「理髪」1名であった³⁷⁾。

学園の特色について、以下に項目をあげて取りあげるが、まず、学園内に理髪所があったという事実が如何にも当時の戦災にあった子供たちの生々しい姿を彷彿とさせる。まさに、この子供たちが交通上または米軍の作戦上支障をきたす、という契機のもとに隔離されたようなものである³⁸⁾。事実、このことも、概して先述の米軍指令文書等に立脚したものとみてよいであろう。

それでは、5月10日の「開園式」から10月22日の学園の児童数増加による学園分離の時点までの展開過程における特色の幾つかを抽出してみよう。

(1) 開園式の内容

まず、日誌が5月7日開校当日から9日までの三日間は欠落していることを念頭においておきたい。つまり、先述の山内氏の文教部への「学校現況報告」に示された開校当日の状況以外、最初の三日間の学園の動向については目下のところ、まだ十分確認されていないと思われる。このことは、今後、米軍側の資料なり、沖縄側の資料(文書または聞き取り調査等)なりによって是非明らかにしたい点の一つである。

さて、開園式の式次第は次のとおりである。すなわち、

1. 一同敬礼、
2. 黙祷、
3. 軍隊長、
4. 園長挨拶、
5. ラジオ体操、
6. 一、二年唱遊、
7. 三、四年競技、
8. 解散 となっている。

この中で、初めに注目されるのは、「黙祷」が設定されていることではないだろうか。これは、まさに日米両軍、沖縄民間人に犠牲者が続出する戦闘さなかの状況を示すものであり、事実、激戦中という異常な状況下の開園式であったということである。おそらく教師や児童たちは、亡き犠牲者の冥福を祈り、且つ沖縄戦の早期の終結と永久の平和を祈念したのだろう。小さい胸の思いにも各々複雑なものがあったかと思われるが、その内容は拠るべき資料なく、推察の域を出ない。さらに注目すべきことは、園長の挨拶の前の軍隊長の挨拶であるが、軍隊長名や挨拶の内容面については全く記載がない。それにもかかわらず米軍占領下の教育事情の片鱗を如実に示す一例だと言えよう。また、教職員以外に石川市の職員や一部父母の参加も考えられるものの、これらの記述も見当たらない。また、ラジオ体操も恐らく国民学校下のそれをそのまま踏襲したものである。ちなみに、当日の出席児童数は『日誌』によると780名(1~4年生)であった。

(2) 学園の運営方針の一面

この面については、直接『日誌』に記述されている訳ではない。したがって、諮詢委員会設立後、翌1946年7月に文教部(山城篤男 部長)宛の「学校設立当時ノ状況報告」を参照して補足しておきたい。それによれば、開園当初の運営状況について、次のような報告がなされている。

開園当初ノ児童ハ一昨年ノ十・十空襲以来身ニ入ル学習ヲナシ得ス、如何ニシテ何処ニ避難スルカノ念ニ追ヒ詰メラレ遂ニハ山ニ走り壕ニ籠モリ学習訓練ヨリ離レシノミナラズ、食糧不

足ノ為顔色青白ク弊衣蓬髪タリシ故尤も^(ママ)養護訓練ニ重キヲ置キ教科に就キテハ最低限度ノ要求
 (読ミ方ニ於テ片仮名平仮名五十音ノ修得、算術ニ於テ暗算掛九九ノ修得、アルファベットハ
 一通リ読ミ書キ出来得ル程度ニ努力セリ)⁴⁰⁾

とされる。米軍側あるいは石川市の教育部からどのような指示指令があったかに就いては『日誌』
 にも何ら記述されていない。しかし、米軍の先述の指令文書で最低限度の読み書き算を施すよう示
 されていたことが反映されているように思われる。尤も、やや後になって、学園に四年以上の児童
 の出席が認められた頃には、少なくとも、表面上はその高学年の科目数が増えていったようであ
 る。⁴¹⁾

それから、やや、児童たちが落ちついた時点には、次の「項目ヲ掲ゲ^(ママ)練成ニ努メタリ」として、
 学園の教育方針を設定していることを確認しておきたい。すなわち、一、責任観念ノ養成 二、親
 切心ノ養成 三、礼節正シキ人ノ養成 四、衛生思想ノ涵養となつている。これらの方針の背景と
 して、当然、当時の児童を取り巻く物心両面の混沌とした極めて不安定な環境が⁴²⁾厳として存在する
 とみてよいであろう。なお、運営面に関連して、カリキュラム等に就いては、後述の項で検討す
 ることとして、次に児童数・教員数の急増の状況を概観しておきたい。⁴³⁾

(3) 児童数・教員数等の動向

『日誌』には、殆ど毎日のようにその日の児童の出席状況が記録されていて、これもこの『日誌』
 およびその時期の注目すべき特色の一つと言えるかも知れない。ただし、かなり詳細な記述がなさ
 れているにもかかわらず、不鮮明で判読の極めて困難な箇所があることから必ずしも日々の記録を
 間断なく本項に採用することは出来ず、したがって、任意に選択してその動向を概観することにし
 たい。

5月10日の開園式当日の学級規模および学年は次のとおりである。⁴³⁾

[表1. 在籍、学年・学級規模]

年	級	在籍	年	級	在籍	年	級	在籍	年	級	在籍		
1	一	50	2	一	55	3	一	51	4	一	50		
	二	50		二	54		二	66		二	45		
	三	60		三	37		三	42		三	50		
	四	35		四	48		四	53		四	44		
		195			194			212			189	総合計	790

以下、任意の日の『日誌』から抽出して次表のとおり作成し、学園の推移動向を把握する為の参
 考に資したい。

[表2. 在籍、学年・学級規模]

6月6日(水曜日)晴天													
年	級	在籍	年	級	在籍	年	級	在籍	年	級	在籍		
1	一	48	2	一	64	3	一	43	4	一	48		
	二	42		二	56		二	68		二	46		
	三	62		三	44		三	63		三	53		
	四	40		四	44		四	54		四	40		
		192			208			228			187	総合計	815

なお、6月7日より、五年生も四年生以下と同様に毎日午前午後に分けて授業を行うに至り、
 この経緯にも当時の複雑な事情があったことを読み取ることが出来よう。

さらに、次表のように、7月に入ると、六年生と高等科一・二年生も少数ながら就学し始めるなど、つい先頃までの国民学校制度の学年形態をとってすすめられた。しかし、徐々に児童数も増加し、学年によっては、一クラス100名を越える程の過密振りで、まさに、後にも先にも例のないような状態がしばらく継続していくのである。

〔表3. 在籍、学年・学級規模および教員数〕

7月13日（水曜日）晴天															
年	級	在籍	年	級	在籍	年	級	在籍	年	級	在籍	年	級	在籍	総計= 1,535 (ただし、教員を除く)
1	一	72	2	一	64	3	一	71	4	一	93	5	一	61	
	二	68		二	62		二	60		二	71		二	44	
	三	57		三	64		三	57		三	66		三	57	
	四	42		四	62		四	112		四	60		四	26	
				五	52		五	60							
		239			304			360			290			188	
初六 = 114, 高一・二 = 40 教員 {男=13 計=29 女=16															

しかし、7月30日に至って、高一・二が廃止されて中等部と青年部を新設することになり当日午後より中等部・青年部生徒の開校式（石川高校の前身となる）が挙行されている。ちなみに、その後の状況（8月15日）について取りあげてみよう。

〔表4. 在籍、学年・学級規模および教員数〕

8月15日（水曜日）晴天															
年	級	在籍	年	級	在籍	年	級	在籍	年	級	在籍	年	級	在籍	
1	一	70	2	一	60	3	一	71	4	一	73	5	一	☆	
	二	72		二	80		二	67		二	77		二	☆	
	三	83		三	79		三	76		三	☆		三	☆	
	四	128		四	66		四	72		四	81		四	73	
				五	57		五	69		五	78		五	45	
								☆		六	73		六	67	
										七	61				
年	級	在籍	年	級	在籍	年	級	在籍	男=18 教員 { 女=24 計=42 総計=2,231 (ただし、教員を除く)						
6	一	63	中 等 部	一	男 27 女 43 計 70	青 年 部	一	23	男 46 女 34 計 80						
	二	42					二	17							
	三	71					三	34							
	四	-					四	6							

☆印は数字の判読不能を示す。

その後、児童、教員の数にはさらに激増を続けるが、学園分離までに殆どピークに近いと推測される時期の状況を次の表に整理して参考に供したい。

〔表5. 在籍、学年・学級規模および教員数〕

10月6日（土曜日）晴天														
年	級	在籍	年	級	在籍	級	在籍	年	級	在籍	年	級	在籍	
1	一	58	2	一	62	3	一	83	4	一	92	5	一	50
	二	58		二	49		二	98		二	65		二	77
	三	42		三	69		三	74		三	74		三	50
	四	70		四	63		四	72		四	84		四	80
	五	76		五	60		五	74		五	99		五	52
	六	60		六	60		六	60		六	75		六	68
	七	72		七	58		七	56		七	80		七	68
				八	54		八	43		八	90		八	85
6	一	81	中 等 部	一	37	青 年 部	一	65	教員 { 男=27 女=37 計=64 総計=3,579 (ただし、教員を除く)					
	二	64		二	55		二	64						
	三	74		三	20		三	55						
	四	68		四	36		四	92						
	五	57					五	25						
	六	74					六	52						

この日の翌日には運動競技大会が開催された。以後、児童数は3500人台を前後しつつ推移していくが、やはり、小学校一校の在籍規模としては異常なまでに大きく、したがって、いよいよ10月22日には分離を余儀なくされるのである。当日は午前8時30分より分校式並びに命名式が石川市長らの臨席のもとに挙行されている。従来の「石川学園」を城前初等学校、新たに分離する新設校を宮森初等学校と命名したのである。なお、この命名については、校長の後日談（エピソード）があり、ここにもまた当時の山内氏の心境の複雑さが看取できるように思われる。すなわち、「伊波城址の麓にあるから『城前校』、『石川^(マ)の官』を含むから『宮森校』としたら」という山内氏の案が採用されての命名⁴⁴⁾だったといわれる。それについて山内氏は、「学校の名称については、私の進言が採用されましたが、実を言うと皇居の宮城の頭文字を取り入れたもので、皇国民を教育するという忠誠⁴⁵⁾がその下心でした」と回想する。その深層部分に、依然として、「戦前」の天皇制下の「臣民意識」があったというところに極めて微妙な心理状況、換言すれば、一貫して連続した意識が内在していたと考えられよう。これに関連したことは次項の末部でもまた別の面から多少取りあげることになろう。

(4) カリキュラムに関連して

この『学園日誌』を見る限り、少なくとも、「開園式」の翌日、すなわち、5月11日より時間帯に基づき授業は開始されたが、授業科目の詳細な内容については殆ど記述がないとみてよい。ただ

し、如何にも当時の混乱状況下での授業だけに初等科では作業関係の記述が多く、たとえば、国語、算数、理科等に関する記述は殆どない。しかし、先に述べたように米軍からの通達等の範囲内で最低限度の読み書き算については、校舎、教科書、ノート、鉛筆類の皆無状態の中でも、直接、山内氏の言葉を借りれば、文字通り、「砂の上に指で字を書かせる」⁴⁶⁾ことから、徐々に創意工夫をしつつ、学び始めたものと思われる。特に唱歌や体育などは、その後が続く他の地域の「青空教室」あるいは「露天学校」などとも大同小異であろう。その内容はともかく、教科の中では最も早く実践されたのではないだろうか。ちなみに、『記録簿』によると7月に入ってから中等と青年部で時間割が明記されるようになり、前者では、漢文、国語、英語、数学、地理、体育、音楽、修身などが設定され、後者には、国語、地理、修身、水産、算術、英語、農業、家事、理科、体操、音楽、漢文、裁縫等が配されている。(ただし、これら科目の順不同)なお、これらの科目にも時期により多少の変動が考えられ、全科目が時間割通り実践されたかどうか、等についてはまだ疑義は残る。たとえば、7月の時点で「修身」という日本における明治初期から設定され、特に15年戦争勃発時あたりから、「教育勅語」の精神を基調として軍国主義的な内容を濃厚にしていた教科目名がそのまま使用されているからである。ここにも、この期の微妙な状況の片鱗が看取されよう。

教科書に関連して付言すると、この時期というのは、いわゆる軍政府文教部編纂のガリ版刷り教科書が登場する前の段階と思われる。したがって、『日誌』にも先生方が、たとえば、出張のかたちで校外に出向き、戦前の教科書、参考書類を収集してくるという事実のあったことが確認されるのである。このような職員の教材収集活動が、同じく沖縄の文化財そして教科書類の収集で広く知られるハンナ大尉と何らかの関係があったか否かについては詳らかではない。ただ、両者共に物理的にも近いところにあり、また、時期的にも早々と実施している点など共通する点がなくもない。

さらに、この時期の『日誌』に眼を転ずると、8月28日には山城篤男氏らが認定授業参観に訪れ、その後山城氏を中心に教科書編纂についての座談会を開催し盛会裡に散会したという。これは、まさに沖縄諮詢委員会開催の前日であり、「石川学園」の校舎がその開催会場として活用されたことは周知のところである。

なお、9月19日付の『日誌』の中には、「女教員全員一年ノ教科書ノ編纂ヲナシタリ」という極めて注目すべき事実も看取される。このことは、仲宗根政善氏らの教科書編纂とも関連すると思われるが、詳細については記載がなく、今後の資料の発掘、聞き取り調査等に委ねざるを得ない。ちなみに、仲宗根氏が、「、、現場からの要望もあって、9月頃から始まって年内には一年生の教科書は出たんじゃないかと思ひます」⁴⁸⁾と回想する面にも関連すると思われるからである。

ところで、正規のカリキュラムとは一応別としても、それを支える全体的な教育方針にも関連すると思われる山内氏の「御製」の件もこの期の「石川学園」の特色の一つとみてよいだろう。山内氏は、毎朝子供たちに、明治天皇の御製、すなわち、「浅みどり澄み渡りたる大空の広きを己が心ともがな」を朗読させたという。とくに、後述するように沖縄戦のさなか、米軍の巡視する中で、これを続行したのである。それについて、曾根氏は、「その頃は日本の敗戦はもちろん、天皇制の廃止論など考えることもできなかったし、またその歌の意味が、えてして暗くなりがちな人心にはむいてると考え」⁵⁰⁾たと解し、次のように述べている。

始めは祈りの文句位にでも考えていたのだろうが、だんだんおかしいと思ったらしく、二世がいろいろきく。結局、「御製とは何だ」というのをその時は口にごしてしまったが、どこかで調べてきて「あれは困る」⁵¹⁾といったので「それではやめよう」といって御製の朗読はやめた。それでも一カ月位は続いた。

事実、8月22日の『記録簿』によれば、「適当ノ時期迄御製朗唱止スルコトニ決定」と明記されている。日本の敗戦(8月15日)の凡そ一週間後のことであった。それにしても、米軍将校の監督下にあつて、このような天皇の「御製」が容易に朗唱できたとは言え、なお検討の余地を残す点

である。これも山内氏自ら綴る次の所言と軌を一つにするものであろうか。「最初は色々と干渉がありました、『自分等の子供を教育するに干渉するなら放棄する』と強く出たのでその後は全く自由に経営することが出来ました⁵²⁾」というのである。

(5) 米軍要員来校の動向

米軍(将校)の学園への巡視、訪問等が頻繁に実施されていることもまた大きな特色の一つと言えよう。これは、おそらく、先述の米軍政府のマニュアルとも言うべきテクニカル・ブルティン等に拠るものであろう。その後設立される諸学校においてもやや似たような米軍による巡視、訪問等はあるが、この「石川学園」程頻繁に行われたかどうか、いずれ比較検討したいところである。『日誌』に巡視、訪問の目的または交流の内容等が必ずしも明確に記載されていないのは残念である。しかし、周知のとおり、翌1946年2月26日文教部長山城篤男および米国海軍軍政府文教将校海軍少佐ウィラード・エイ・ハンナより交付された「文教時報」第1号通牒によって、米軍教育将校と学校長および教師の学校運営面の関係が一段と明確になった経緯がある。まず、「文教部職員ハ沖縄人教育家ヲ以テ組織シ米国海軍政府将校監督ノ下ニ活動スルモノ」とし、さらに次のように示された。

米国教育将校ハ教育本部職員ヲ監督シ学用品ノ供給及発送ノ任ニ当リ各地区ニオケル米国将校ハ教師及ビ生徒児童ニ対シ物的援助ヲナシ、校舍及ビ諸施設等ノ造営ニ協力スルモノデアリマス。

学校長及ビ教師ハ沖縄文教部及ビ米軍教育将校ヨリ発セラレル訓令ニ基イテ学校ノ経営ヲナシ児童及ビ生徒ノ教育ニ対シテ最上ノ計画ヲ樹テ^(ママ)ル責務ヲ有シテ居マス。⁵³⁾

「石川学園」の場合は、勿論、上記の通牒交付以前であり、先述のように、米軍の他の指令に則った面も考えられる。しかし、結果論的になるが、かなり、この通牒に沿うものであったと解してよいのではないだろうか。尤も、山内氏の先述の所言のとおり、かなり寛容な面もあったとすれば、若干の相違点は考慮されよう。しかし、この通牒成立にあたっての先駆的というより、試金石的な役割をも有していた面はなかつただろうか。いずれにせよ、『日誌』を見る限り、詳細は不明とは言え、この期間中の米軍関係者の来校の概況について、記された範囲内の事例を下の表に纏めることによって参考に供したい。

[表6. 米軍政要員等来園の状況]

年 月 日	軍 政 要 員 等 氏 名	事 項	備 考
1945. 5. 10.	ウキンド大佐	開園式参加	
5. 15.	アレン大尉	来校	
5. 16.	三宅通訳	赴任挨拶ノタメ	
5. 17.	アレン大尉、 三宅通訳	来校 来校	
5. 18.	ベンザン少佐、 外二将校	来校	
	米兵	来校、遊び道具設計ノタメ	
5. 19.	米兵二名、 三宅通訳	来校 来校	

年 月 日	軍 政 要 員 等 氏 名	事 項	備 考
5. 29.	フランク、キング、 松元通訳	来校	
	アレン大尉、 奥平憲兵	来校	
5. 30.	フランク、キング、松元通訳	男子15才以上55才迄の尋問ノタメ	理髪所ニテ実施ス
5. 31.	キング、松元通訳	来校	
	ウィンド中佐外5名	情報視察ノタメ	
1945. 6. 1.	松元通訳	来校	
6. 4.	アレン大尉、米軍憲兵隊長、 通訳、班長		裁判事件処理 ノタメ ?
6. 5.	米国衛生技師 2名、奥平通訳	衛生面ノ協議会ノタメ	
6. 6.	アレン大尉	来校	
6. 7.	奥平通訳	来校	
6. 12.	クラーク技師	遊戯道具作製ノタメ	
6. 16.	病院長ドクターフランク氏	来校	
	アレン大尉	来校	
	クラーク技師	遊戯道具作製ノタメ	
6. 17.	クラーク技師	来校	
6. 22.	アレン大尉	来校	
6. 30.	アレン大尉外3名、 小谷通訳	来校	
		来校	
7. 5.	マライース米軍牧師、 アレン大尉	来校	
7. 8.	アレン大尉	来校	
7. 9.	サトルス大尉	授業参観ノタメ来校	
7. 10.	ポール中佐	衛生問題調査及び種痘接種 状況調査ノタメ来校	
7. 11.	アレン大尉	新事務所参観ノタメ	
	ポール中佐	学校ノ衛生問題調査ノタメ	

年 月 日	軍 政 要 員 等 氏 名	事 項	備 考
7. 12.	宜寿次軍属	児童ニ対シ危険物ノ説明ヲ スルタメ	
7. 15.	アレン大尉	来校	
7. 18.	小谷通訳	来校	
7. 19.	小谷通訳	来校	
7. 25.	サット大尉、 小谷通訳、島清ノ諸氏	来校 サット大尉ヨリ辞苑1冊 寄贈	
1945. 7. 26.	アレン大尉、 小谷通訳	来校	
	サトルス大尉	新聞配布ノタメ来校	
7. 30.	サトルス大尉外10名	学校巡視ノタメ来校	
	サトルス大尉	来校	二度目(?)
8. 1.	サトルス大尉、 小谷通訳	来校	
8. 3.	小谷通訳	来校	
8. 5.	サトルス大尉、 小谷通訳	少年団結成、参加ノタメ 来校	
8. 6.	アレン大尉、 サトルス大尉	来校(午後4時よりアレン 大尉送別会開催ノ件ニ付キ 屋我市長外数名本事務所ニ 会合アリ)	
8. 7.	アレン大尉	告別の挨拶ノタメ (部長区長の集会アリ)	
8. 9.	サトルス大尉	来校	
8. 10.	アレン大尉外 3名	来校	午後4時サト ルス大尉、 合同会議
8. 11.	アレン大尉	午後2時ヨリ校庭ニ於イテ アレン大尉ノ送別会アリ	全職員送別ノ 宴ニ列席ス
	サトルス大尉	フットボール修繕ノ上持参	
8. 12.	アレン、サトルス両大尉	来校	
8. 13.	アレン、サトルス両大尉	来校	

年 月 日	軍 政 要 員 等 氏 名	事 項	備 考
8. 14.	小谷、宮城両通訳	来校	
	アレン大尉	来校、明日ヨリ開催セラルル県下代表者会議開催ノ件ニ関シ、アレン大尉外関係職員ノ会合アリタリ	仮諮詢委員会の件（引用者注）
8. 15.	白井通訳	来校	
8. 17.	サトルス大尉	英語講習会開催ノタメ	午後6時ヨリ7時マデ
1945. 8. 18.	サトルス大尉	英語講習会開催ノタメ	
8. 19.	米軍 氏（?）	来校、英語ノ本8冊寄贈	
8. 26.	サトルス大尉	来校	
9. 4.	アレン大尉	来校	
9. 10.	カックス先生	米軍ヨリ英語ノ先生派遣セラレ、青年部及ビ中等部ノ教鞭ヲトル	
	サトルス大尉外1名	来校、フットボール、バット、ボールノ寄贈アリ	
9. 11.	憲兵隊長	来校、用紙、ピンポン玉及ビラケット網等ノ寄贈アリ	
9. 24.	サトルス大尉	来校	
10. 12.	カックス先生		米国帰国ノタメ辞任
10. 13.	ハウプキンス先生	伝道説教講演会	午後7時ヨリ

【注】 = 外国人名（片仮名）は、すべて【日誌】に表記されたとおりに掲載した。

(6) 「少年団」の設立とその活動の一面

これまで考察をすすめてきた中にも、いわゆる、「戦前」の皇国主義的、軍国主義的教育を彷彿とさせる面の残らしきものに驚嘆させられたが、この「少年団」こそ、まさにその典型的な例とでも言えそうである。しかも、沖縄戦は殆ど終了した段階とはいえ、米軍の本土侵攻作戦は依然続行中という時期の8月5日にこの学園で「少年団」の結成式が行われている。さらに、その結成式には、米軍将校、すなわち、サトルス海軍大尉、小谷通訳らも臨んでいるのである。何よりも先に排除されるべきものと思われた「少年団」が再び結成されるとは一体どういうことなのだろうか。いくら米軍とは言え、その時点で、そのような寛大なる態度をとったのであろうか。もっと別の名称は他になかったのであろうか。いろいろと疑念が残ることは否定できないと思う。

しかし、日本の軍国主義教育に厳しい批判を加える筈の米軍が簡単に容認する筈もない。それでは、まず、結成式の様子を垣間見てみよう。

式典のプログラムは次のとおりである。(1) 敬礼 (2) 開式ノ辞 (3) 祈念 (4) 部長訓辞 (5) 市長訓辞 (6) 閉式ノ辞 (7) 一同敬礼 となっている。次に、訓練事項としては、(1) 分団長及び班長紹介 (2) 分団長班長ノ命ヲ遵守 (3) 標準語励行中ノ挨拶ノ□ (4) 朝ト夕方ノ清掃 (5) 分団長班長ノ常会 (6) 区常会 (7) その他 となっている。⁵⁴⁾

【記録簿】には、案内状として、各区長、社会部長、市長、アレン大尉らが記されていることから、当然、彼らの参列が予想されよう。ちなみに、部長訓辞は時の横田社会教育長が行ったものと推察される。それでは、この「少年団」結成にいたる過程を瞥見することによって、おおよそその性格を極力浮き彫りにしてみよう。

7月22日の【記録簿】に、少年団の組織指導について次の項目をあげている。すなわち、

1. 各区毎に集め其の区担任職員を以て指導せしむること。
2. 各区毎に班長区長制の役員を其の少年団員より選出し、自治的に指導せしむること。
3. 来る日曜日に児童全体を集め各区の担任職員をして各区調査せしめ纏めて学校へ集合せしむること。病気以外の全生徒を集合せしむること。
4. 少年団員は高等科以下とし高等科生は役員とす。
5. 五年以上家庭の状況に依り作業の出来るものは各区長に_____

なお、訓練項目の一例として、8月12日(?) の場合を挙げ、取り敢えず、そのプログラムを垣間見ることにしよう。すなわち、

1. 集合
2. 挨拶
3. 祈念
4. 人員点呼
5. 体操(合同体操)
6. 主任より左の事項を伝達。
 - (イ) 標準語励行、、、悪い言葉のハーバー等の言葉をつかわぬこと。
 - (ロ) 乞食根性、、、物もらいをやめること。逃げて物を_____とらぬこと。
 - (ハ) 清掃作業励行、、、_____
 - (ニ) 礼儀を重んずること。服装を正しくすること。挨拶_____
 - (ホ) 左側通行を励行すること

【ただし、_____線の部分は文字の判読不可能を示す。】

となっているが、判読の不可能な箇所が多いのは残念である。ともあれ、このような面から、「少年団」の性格なり、活動なりが幾分推察出来るのではなからうか。ただ、その目的としては、かつての、いわゆる「大日本青少年団」の場合と異なるのであろうが、方法、形態面では前者を彷彿とせしめる。そのような点から、「戦前」の教育形態との微妙な連続性の面についても、なお検討の余地を残すものと解されよう。一方、直接この「少年団」という訳ではないが、程なくして「団体訓練」が取り止めになった⁵⁵⁾、ということは、先述の「御製」の場合と結局大同小異であらう。

ちなみに、この「団体訓練」の取り止めの経緯について、曾根氏は山内氏より次のような聞き取りを試みている。

新敷地に移って職員の陣容も揃ってくると、体育主任格の教師も出て、全校の集合、解散などにも、大きな号令をかけて子供をしつけた。例の通訳兼務の二世が「まずいな まずいな」というのを、茶飲み話でも聞いているような態度で聞き流していた。それでもその号令教師は、いや気がさして他の作業場に行って失った(ママ)。やがて伊波城址の付近にあるMPがキャンプからやって来て、「団体訓練は困る。何も一々号令なんぞかけずとも各自で自為(ママ)に集まったり、解散したりすればよからうといったので止めた。これは一カ月以上続いたが、その間MPは⁵⁶⁾双眼鏡で山の上から見張っていたのだらう。

結果論ながら、米軍は、このような「団体訓練」が、翌年交付された例の「文教時報」第1号の通牒に明記される「軍事的国粹的教育訓練」に類似するものか、それに陥る危険性を予め警戒したものと思われる。ちなみに、その通牒の一部を以下に挙げておきたい。

…、朝礼訓話ソ他生徒児童ヲ集合シ又は解散スル時ニ当ツテ余リニ軍事的訓練式ニナツタリ、「気ヲ付ケ」ノ時余リニ長クシャチホコ張ツタ姿勢ヲ執ラセルコトハヨクナイコトデアリマス。行進ノ如キモ位置ヲ換エルタメノ手段デアルカラ兵式訓練式ニ流レルコトヲ避ケルコトハ最モ大切デアリマス。⁵⁷⁾

たしかに、このような「団体訓練」は自制していただろうが、しかし、「少年団」活動そのものは、石川学園時代の後半においても、依然として米軍占領初期ごろの、いわば「社会教育」的な活動として存続したのである。⁵⁸⁾

(7) 学園長および教師たちの精神的状況の一断面

沖縄戦の組織的集結（1945年6月23日）あるいは日本の敗戦（同年8月15日）という画期的な段階に関連して、学園長の心的、精神的な状況にも何らかの変容があったのではないと思われるが、『日誌』や『記録簿』を見るかぎり、余り顕著な面は看取できない。しかし、少なくとも日本の敗戦前における山内氏の心境は如何だったろうか。このことは、学校経営面にもかなり関わる問題であろう。まして、沖縄戦の最中における学園発足の当事者というにおいてをや、である。

山内氏もまた、かつて軍国主義的教育を受け、また教える立場にある教師の一人であったことは事実である。しかし、米軍の捕虜の身となり、文字通り、路頭に迷うおびただしい弊衣蓬髪の子供たちを目前にすると、ただただ放任はできないという心境に追い込まれ、「燃ゆるが如き愛」を唯一エネルギー源として、ひたすら、学校経営にあたったのであろう。とくに、沖縄戦中を考えた場合、米軍要員らは先に示した表のとおり、毎日のように訪ねるといふ、ある種の監視下にあり、一方、『日誌』および『記録簿』では殆ど確認出来ないが、日本軍によるある種の脅威下にあったこともまた事実である。「捕虜ヲ潔シト思ハザル者、収容中逃グル者多カリキ。ソノ中ニハ途中不幸ニモ敵弾ニ斃ル者ニ・三ヲ下ラザリキ⁵⁹⁾」という状況が厳としてあったことも考慮に入れておきたい。

直接、山内氏に接した曾根氏は、山内氏による初期頃の教師の採用面について、次のように報告している。

…、その日その日の作業員をあてにするわけにもいかず、山内氏は本職の教師さがしを始めたが、これが難渋を極めた。米軍を恐れてかくれていた女教師には、二世軍人をつれて行って、彼の口から「あなたの生命は絶対保障する」と言って説いて、やっと天井裏から連れ出した。日本軍の報復を恐れていた男教師には、「アメリカの子供を教育しようというのではない。自分たち沖縄の子供を守ろうというのだ。もし、私たちのやる事がアメリカの利益になるといふことなら、その責任は私たち家族——中略——がとろう。あなたはただ私に頼まれたと言えればいいではないか」と言った。当時身内の者が日本兵に斬殺されて、怯えきっていたその人は「あの時の、家族ぐるみの命をかけた山内校長の言葉には、私はもはや固辞できなかった⁶⁰⁾」と述懐した。

さらに、先述の米軍要員の学園来訪にも深く関連する点で、当面の『日誌』や『記録簿』からは殆ど確認できないが、米軍側の厳しさの一面について、同じく山内氏を取材した曾根氏の記録から引証しておこう。

軍の命じた保護・管理の域を逸脱したとみたのだろうか、アメリカ軍はこの学園を、少なくとも子供たちがいる間は四六時中、二世を含めた二人の専属とみられるMPが看視（ママ）した。とくに全体集会などには神経をとがらせている風であった。これに教師たちがおじけづく

と、山内校長はいつもおなじ事をくりかえした。「米軍に対しても、日本軍に対しても、私たち家族の命をかけて責任をとる。心配するな」と。⁶¹⁾

このように、米軍と日本軍のはざまで、両者の厳しい「眼」を意識しつつ教育実践せねばならないのは、勿論、山内氏のみではなく、他の教師も、またその後、日本の敗戦前、少なくとも沖縄戦中発足した他の地域の学校教師たちも大同小異であったと思われる。しかし、概して、敗戦（8月15日）後に設立された沖縄の諸学校においては、これといささか異なる精神的状況が逆に考えられるし、その点で、山内氏や「石川学園」の教師たち、そして敗戦前における他の地域の教師たちの特異な心理状況をも推察されよう。また、このような心理現象は、単に教師のみに限らず、場合によっては、子供（児童生徒）たちにも起きたのではないかと思われるが、その詳細な検討については、この時期における教師たちの上述の心理状況以外の側面と共に、ここでもまた当時の体験者の記録集なり、聞き取り調査等による今後の研究に委ねざるを得ない。

(8) 物資の供給

この時期における教師たちの精神的状況の特異性について言及してきたが、ここで、いわば、戦災の結果、ゼロから出発した「石川学園」の子供たちや教師たちに如何なる物資類の供給がなされたのか、とくに、当時、概して現金は使用されず給与は現物給付だったことも念頭に入れておきたい。本項では、日々の『日誌』に現れた範囲内でも筆者の判読できる部分について表に纏めてみたので、その表を掲げるに留め、今回は紙幅の都合により内容の分析検討については割愛させていただきたい。なお、事項の記述は『日誌』に記載されたとおりの形態を採用する。ある種極限状況の中で、日々生活の糧を与えられながら生きる教師や子供たちの生身の姿が行間に滲み出ているように思われるからである。

[表7. 学園内における物資供給・特配の状況]

年 月 日	事 項
1945年5月12日	昼食ヨリ野菜ノ特配ヲ得御汁ヲ準備シタリ
5月24日	児童ニ対シ被服ノ配給ヲナス
5月29日	煙草ノ特配ヲ受ク
5月30日	男ノ職員ニ対シ被服ノ特配ヲ受ク
6月14日	婦人洋服一着宛職員ニ対シ特配アリ
6月15日	男職員11名ニ対シ煙草ノ特配
6月16日	米ト大豆ノ特配
6月17日	煙草ノ特配
6月19日	豚肉半斤位ノ特配アリタリ
6月29日	職員一同ニ対シ ☆肉の特配アリタリ
6月30日	薪ノ特配ヲ受ク 煙草ノ特配ヲ受ク
6月1日	薪ノ特配ヲ受ク
7月2日	御茶ノ特配
7月4日	煙草特配アリ
7月5日	米袋ノ特配ヲ受ク
7月6日	肉配給アリ
7月13日	?袋4枚ノ特配アリ

年 月 日	事 項
1945年 7月15日	罐詰ノ特配ヲ受ク
7月19日	罐詰ノ特配ヲ受ク
7月21日	軍ヨリ直接罐詰ノ特配ヲ受ク
7月25日	米軍ヨリ直接罐詰ノ特配ヲ受ケタリ
7月26日	小豆 5 升 1合ノ特配ヲ受ク
7月27日	米25升(?) 塩2 斤100 匁ノ特配ヲ受ク
7月28日	大豆13升 5 合。白糖升 2 合 菓子 2 箱ノ特配アリ
7月30日	昼食用菓子40箱特配ヲ受ク
7月31日	昼食用罐詰42個受領
8月 6日	昼食用菓子箱45個貰ヒ受ク
8月 7日	昼食用菓子箱45個貰ヒ受ク
8月 8日	昼食用菓子箱48個貰ヒ受ク 本部ヨリ鉛筆8 本 カード百枚 洋白紙百枚ノ特配ヲ受ク 麻袋24枚ノ特配ヲ受ケタリ
8月 9日	昼食用罐詰48個貰ヒ受ク
8月10日	昼食用罐詰48名分貰ヒ受ク
8月11日	昼食用罐詰48名分受領ス
8月12日	昼食用罐詰48名分受領ス 石鯨36個(?)ノ特配ヲ受ク
8月13日	昼食用罐詰48名分受領 靴下 8 足特配ヲ受ク 麦粉 2 升 } 特配 食用罐詰48名分 味醬 (ママ) 5 升
8月14日	昼食用罐詰48名分受領
8月15日	イワシノ罐詰4 個ト昼食用罐詰48名分貰ヒ受ク ト _____ ヲ 47 名分特配ヲ受ケ各職員ニ抗交付セリ
8月16日	昼食用罐詰48名分受領
8月17日	米 8 斤(?) 人参3 斤ノ特配ヲ受ク昼食代用ヲナス 種子油特配ヲ受ク
8月18日	昼食用御米18升4 合 竹ノ子缶詰二缶 御砂糖(?)2斤ノ特配ヲ受ク

年 月 日	事 項
1945年 8 月14日	昼食用罐詰48名分受領
8 月19日	昼食用罐詰49名分特配
8 月20日	昼食用チョコレートトチーズ48名及び白糖5 ポンドノ特配ヲ受ク
8 月21日	御米3 升6 合8 勺、豆3 升6 合8 勺ノ特配
8 月22日	昼食用罐詰49名分受領
8 月23日	昼食用罐詰49名分受領
8 月24日	昼食用罐詰49名分受領
8 月25日	昼食用罐詰49名分受領
8 月26日	昼食用罐詰49名分受領
8 月27日	昼食用罐詰49名分受領
8 月28日	昼食用罐詰49名分受領
8 月29日	昼食用菓子50名分受領
8 月30日	昼食用菓子50名分受領。 鉛筆 1打 特配ヲ受ク 女教員25名ニ対シ靴ノ特配ヲ受ク
8 月31日	昼食用菓子51名分受領
9 月 1 日	昼食用菓子箱52名分受領
9 月 2 日	御米 3 升 9 合 罐詰13個特配
9 月 3 日	女教員ニ対シ白布(洋服地)ノ特配アリ。 米 8 升 8 合 砂糖 3 斤半ノ特配受ク 中等部女子ニ対シ白布上衣分(裁縫材料)特配ヲ受ケ生徒へ交付ス 新 女教員 5 名ニ対シ靴及ビ衣袴(?)ノ特配ヲ受ク
9 月 4 日	昼食用米 6 升 5 合特配ヲ受ク 男教員ニ対シサツ分(ママ)ノ白布ノ特配ヲ受ク
1945年 9 月 5 日	昼食用米 7 升 9 合 5 勺 塩 9 合 5 勺ノ特配ヲ受ク
9 月 6 日	昼食用米 6 升 6 合特配ヲ受ク 下記ノ学級ニ対シ白布ノ配給ヲナシタリ 初六ハ男女共。 青年部及中等部全員総人員881名へ
9 月 7 日	昼食用米 8 升 味噌 2 貫20勿種子油 1合 3 勺ノ特配ヲ受ク 初五年ノ 1 組ヨリ 5 組迄ト初 4 年ノ1.3 (?) 組総計764 名ニ対シ 白布ノ特配ヲナシタリ。

年 月 日	事 項
1945年9月8日	昼食用米6升6合3勺罐詰4個砂糖1貫2匁豆腐2枚ノ特配ヲ受ク
9月9日	昼食用米4升5合5勺罐詰14個特配ヲ受ク
9月10日	昼食用米6升8合8勺特配ヲ受ク 米軍ノ労務関係ノ 大尉フットボール4個バット3個ボール1個寄贈アリ。
9月11日	昼食用米6升8合8勺ノ特配ヲ受ク 憲兵隊長来校シ白墨白紙ピンポン玉及ラケット網等ヲ寄贈シタリ
9月12日	昼食用米6升8合特配ヲ受ク
9月13日	昼食用米6升8合8勺ノ特配ヲ受ク
9月14日	昼食用米7升特配ヲ受ク
9月15日	昼食用米7升 総食用米1斗4升 並御菓子__箱白糖10__ノ 特配ヲ受ケ総会へ振り向ケタリ
9月16日	昼食用米1升5合罐詰7個ノ特配ヲ受ク
9月17日	昼食用米7升ノ特配ヲ受ク
9月18日	昼食用米7升ノ特配ヲ受ク
9月19日	昼食用米7升1合3勺菓子等ノ特配ヲ受ク 軍政府ヨリ洋白紙 500枚束ノ43束ノ寄贈アリタリ
9月20日	昼食用米6升8合8勺ノ特配ヲ受ケタリ
9月21日	カックス先生ヨリ洋白紙__寄贈アリタリ 昼食用米6升8合8勺 罐詰3個 味噌5貫500匁ノ特配ヲ受ク
9月22日	昼食用米6升8合8勺並御茶ノ特配ヲ受ケタリ
9月23日	昼食用米1升4合並罐詰9個チーズ10個ノ特配ヲ受ケタリ
9月24日	昼食用米7升1合ノ特配ヲ受ク カックス先生ヨリ洋白紙18,000枚鉛筆767本ノ寄贈アリタリ 児童体育学習__書一冊山口子辰先生ヨリ寄贈アリタリ
9月25日	昼食用米7升6合3勺ノ特配ヲ受ク
9月26日	カックス先生ヨリ色鉛筆洋白紙__枚青紙300枚封筒其ノ地 色紙インク巻紙__853個ノ寄贈アリ 昼食用米8升罐詰4個ノ特配アリ 米軍ヨリ洋白紙6万枚ソノ他物品ノ寄贈アリタリ

年 月 日	事 項
1945年 9 月27日	米軍ヨリ洋白紙ソノ他学用品沢山ノ寄贈アリタリ 昼食用米 _____
9 月28日	昼食用 8 升ノ特配ヲ受ク 学校職員家族及部長級以上ノ方ヘ子供服1 着宛特配ヲタシタリ
9 月29日	昼食用米(二十九日及三十日ノ二日分) 8 升 2 合 5 勺ノ特配ヲ受ク 罐詰1 個ト魚罐詰 3 個 米軍ヨリ洋白紙(6,000枚入) 66個寄贈 アリ。396,000枚 中等部一人当たり130枚宛洋白紙ヲ交付ス
10月 1 日	米軍ヨリ洋白紙16個 9 万 6 千枚寄贈アリ。
10月 2 日	漁業組合ヨリ タコ 5 斤位ノ特配アリ 昼食用米 (?)
10月 3 日	市役所ヨリノ要求ニヨリ洋白紙五百枚交付シタリ。
10月 4 日	市学務課 洋白紙 1 箱(6,000枚) 下付シタリ 昼食用米 (?)
10月 5 日	米軍ヨリ洋白紙ソノ他ノ寄贈アリタリ。
10月 6 日	運動競技大会ニ於ケル昼食用トシテ全児童並生徒ニ対シ米1 人当り 九勺豆一掴ミ宛特配ヲナシタリ。 昼食用米 1 袋 2 升 5 合
10月 8 日	職員ニ対シ毛布 1 枚ノ特配アリ。 衛生係ストアル氏ヨリ野菜花木ノ種子ノ特配アリ 昼食用米 8 升 6 合 3 勺
10月 9 日	職員ニ対シ芋ノ特配アリ 昼食用米 1 袋ト 2 升 5 合ノ特配ヲ受ク
10月10日	昼食用米(?)
10月11日	昼食用米 8 升 7 合 5 勺罐詰 4 個味噌 4 貫 6 百匁ノ特配ヲ受ク
10月12日	当分昼食ノ準備出来兼ネ全職員ニ対シ御米 1 合 2 勺宛交付セリ
10月13日	昼食用米 1 袋ト 3 升ノ特配ヲ受ク 全職員ニ対シ靴下及米 2 日分ノ特配ヲ受ク
10月15日	全職員ニ対シ昼食用米 1 合 2 勺ノ特配ヲナシタリ。
10月16日	昼食用米 1 合 2 勺宛全職員ニ特配セリ。

年 月 日	事 項
1945年10月17日	平良産業課長来校シ全職員ニ対シ野菜ト御芋ノ特配ヲナス旨申シ出ニ依リ女教員七・八名野菜取り青年部生徒ヲシテ芋掘り作業ニ従事セシメ特配ヲナシタリ
10月18日	鮮魚50斤ノ特配ヲ受ケ全職員分散会ヲ開催ス
10月19日	警察部ヨリ煙草400 本ノ特配ヲ受ケタリ 昼食用米ヲ1 人当り1 合2 勺ノ特配ヲ受ク
10月20日	収容所金城部長ヨリ太鼓1 個寄贈アリ
<p>備考：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. _____ の部分は判読不能 2. 一部例外を除き、使用文字は出来るだけ原文のままにした。 3. 米軍人の来校関係では、先の来園表と一部重複する箇所がある。 4. 句読点、漢字の使用なども、なるべくそのままにした。 5. 一部、当用漢字を使用した。 	

VI. おわりに

以上、「日誌」および「記録簿」を中心に石川学園時代の動向について考察してきた。その際、若干の要因を設定して究明を試みたものの、まだ他にもかなり多くの要因が漏脱しており、その点、小論は、僅かにその一部分の一断面にしか迫りえなかった。これで「石川学園」の当時の動向に関する特質が十全に彫塑されたことにはならないし、それだけに今後一層分析検討しなければならない面を多々残す結果となった。

概して、「石川学園」の開校（5月7日）前の5月1日に運動場整地作業の許可が軍より下りたこと、児童生徒の増加率が極端に高くなり、学級規模など異常な拡大を示したこと、開校早々から「黙祷」の続行はともかく、「御製」には微妙な連続性が看取されること、米軍要員訪問頻度について表を作成してみて、その異常な多さを再認識出来たこと、いささか戦時下教育を彷彿とさせる「少年団」の結成と展開が見られたこと、日本本土の様な比較的徹底した占領教育政策は見られないが、学園で僅かに実施された教育政策の一部が本土の敗戦後教育の先駆的役割を果たしたふしもあること、学園長はじめ教師たちの精神的状況には、たとえば、本土のような敗戦後発足した諸学校の教師たちのそれと、ある種複雑微妙な差異があるのではないかと推察し、その特異性を指摘したこと、さらに、困窮状態に陥った学園（主に教師への現物給付が顕著）への日々の食糧や物資の供給などがこの期における動向の特質の一端を形成すものとして辛うじて浮き彫りにすることが出来たかと思う。

しかし、使用した「日誌」および「記録簿」の再確認やあらたな史料批判、米軍資料および本土の占領政策関係の資料等、傍証資料の分析検討比較などの必要を痛感しつつ、十分それも果たすことが出来なかった。その点でも小論は大きな限界を持っている。今後、先に示した漏脱要因と共にさらに米軍側（たとえば、「日本」からの分離政策等にかかわる各収容地区での軍政府教育担当将校関係）そして沖縄側（と、これに関連する本土の戦後占領教育政策関係）資料の収集比較分析と、当時の体験者に対する聞き取り調査等を広く先島、離島等をも含めて再検討を行い、これを機に、米軍の沖縄占領初期の教育政策をはじめ極限状況にあった教師や子供たちの諸活動面の実態と彼らの意識面の深層を究明する手掛かりを得たいと思う。同時にまた読者諸賢の忌憚のないご批正とご教示ご指導をいただければ幸いである。

最後に、この学園の20周年「記念誌」⁶³⁾に寄せられた関係者の作になる歌二首について、深く印象に残っているので掲載させていただきたい。

いくさ世にうぶ声あげし城前の
平和な学園いやさか祈る
発祥の地を歴史につづり巢立つ子よ
世界平和のかけはしとなれ

なお、拙稿を急ぎ纏めるにあたり、曾根信一氏をはじめ城前小学校校長伊波久彌氏および同校教職員、石川市立歴史民族資料館の島袋勝三氏、宮里実雄氏、公文書館主任専門員の玉津博克氏そして多くの方々、関係機関のご理解とご協力に対し、心から謝意を表する次第である。

〈図の説明〉

図1. = 「石川学園発祥記念碑」(現在の城前小学校玄関前に建立)
 [撮影筆者。1996年11月7日。]



図2. = 中(南)部戦線の概況(米軍側資料の一例)
 [Appleman, et al., *The War in the Pacific, Okinawa: The Last Battle*, Washington, D.C.: Center of Military History, 1991, より。]



図3. = 中南部戦線の概況(沖縄側資料の一例)
 [琉球政府編、『沖縄県史』第9巻、各論編8 沖縄戦記録1、1971年、より。]

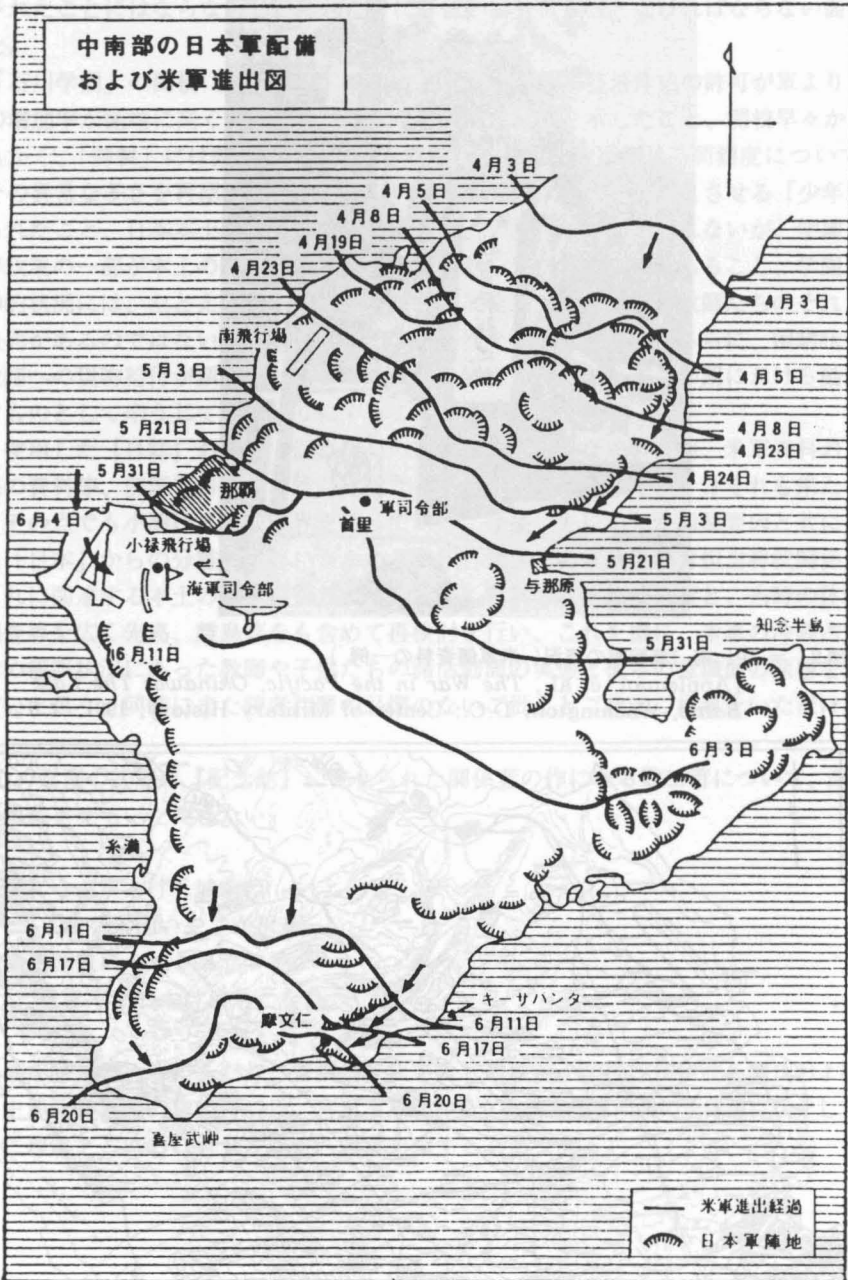


図4. = 『石川学園日誌』(15cm×21cm) (『記録簿』も一部この中に綴られている。)
 [石川市立城前小学校所蔵。同校のご好意による。]



図5. = 「石川学園」の「仮敷地」(発足当時)跡略地図(黒色の部分)
 [ゼンリン編、『ゼンリン住宅地図'91 石川市金武町宜野座村』
 1991年、より。石川市立歴史民族資料館のご好意による。]



〈注〉

- 1) 沖縄県教育委員会編、『沖縄の戦後教育史』、セントラル印刷、昭和52年、p.6.
- 2) この時期の戦況については、多くの資料、著書類があるが、ここでは、Roy E. Appleman, et al., *The War in the Pacific, Okinawa: The Last Battle*, Washington, D.C.: Center of Military History, 1991, pp.283-359.と、琉球政府編、『沖縄県史』第9巻各論編8、沖縄戦記録Ⅰ、大同印刷、1971年、P.1067など参照。
- 3) 曾根信一、「—まだ銃声が聞こえる中で始められた戦後最初の学校— 石川学園の記録〈山内繁茂氏を囲む人々〉」、『琉球の文化』《沖縄戦と終戦直後の生活》第5号、1974年5月、pp.40-45.
- 4) 上沼八郎、『戦後沖縄教育小史—教育民立法成立の過程—』、南方同胞援護会、昭和37年、pp.8-9.
- 5) 森田俊男、『アメリカの沖縄教育政策』、明治図書、1966、pp.25-26.
- 6) 川井勇、「第1章2節 軍政の開始と学校教育に再開」、玉城嗣久、川井勇、「戦後沖縄教育の一考察」所収、『琉球大学教育学部紀要』第26集 第一部、昭和58年1月、p.305.
- 7) 鹿野政直、『戦後沖縄の思想像』、朝日新聞社、1987年、pp.60-61.
- 8) 榊原昭二、『沖縄・八十四日の戦い』、新潮社、昭和58年、pp.34-37. なお、榊原氏も同様に山内氏に対し聴き取り調査を試みている。
- 9) 大内義徳、「アメリカの対沖縄占領教育政策」、『沖縄文化研究』21、1995年2月、pp.291-295. なお、大内氏も山内氏に対する聴き取り調査を行っている。
- 10) 琉球政府文教局、『琉球史料』第3集、1958年、pp.30-31.
- 11) 伊波信光編著、『石川市史』、昭和63年。曾根氏の上記の論述が若干加筆されて掲載されている。pp.329-341.
- 12) 大田昌秀、『沖縄の挑戦』、恒文社、1990年、pp.207-236. および我部政明、『日米関係のなかの沖縄』、三一書房、1996年、p.64-65. なお、『民事ハンドブック』そのものについては、沖縄県立図書館史料編集室編、『沖縄県史 資料編1 民事ハンドブック』の沖縄戦1として、原文編と和訳編が1995年に出版された。
- 13) 大田、「前掲書」、p.240. 及び竹前栄治、天川晃、『日本占領秘史(上)』、朝日新聞社、昭和52年、pp.114-129.
- 14) Arnold G. Fisch, Jr. *Military Government in the Ryukyu Islands, 1945 - 1950*. Washington, D.C.: Center of Military History, United States Army, 1988, p.19.
- 15) 大田、「前掲書」、pp.211-212.
- 16) 川井、「前掲論文」、p.305.
- 17) Operational Directive Number 7 for Military Government of the Commanding General Tenth Army (Short Title: GOPER), 6 January 1945 in Fisch, Jr., op.cit., p.240.
- 18) Headquarters Tenth Army, Office of the Commanding General, APO 357, Technical Bulletin, 5 February 1945, [『ワトキンス文書』第22巻、pp.113-156.]
- 19) 同頁。なお、このテクニカル・ブルティンは、すでにゴールドン・ワーナー氏の著書にも紹介されているが、(3)の国家主義的性格のもの禁止等に関する面については欠落している。ゴールドン・ワーナー、『戦後の沖縄教育史』、日本文化科学社、1972年、p.16. 参照。
- 20) 「同書」、pp.155-156.
- 21) 我部、「前掲書」、pp.61-62.
- 22) Military Government Circular No. 16, 15 May, 1945. [『ワトキンス文書』第29巻、p.176.] ちなみに、この教育と娯楽のプログラムは機構と活動の二つの分けられている。前者では、各地域に教育と娯楽の経験者を監督者にして地域の班長や他の指導者の支援を受ける。各30人の子供に対して民間人一人をあてがうものとする。後者では、そのプログラムが日々の初等学校学齢の子供たちの活

動となる。軍政府将校の指導と援助によって校長と班長は教師の選出と指導を行い、簡単な設備を用意し、さらに次の諸活動に配慮するものとする。すなわち、(1) ゲームと他の体育的なレクリエーション、(2) 唱歌と簡単な手工そしてそれらにかかわる諸活動、(3) 単純なレベルで行えると共に最小限度の教材供給による読み、書き、算の訓練、とされた。

23) 山内繁茂、「思い出」、城前小学校編『しろまえ 20 年記念誌』、1965年、pp.14-15.

24) 『琉球史料』第 3集、p.30.

25) 同頁。なお、石川周辺の子供たちの状況については、幾つかの傍証資料がある。

ここでは参考までに一例として、仲宗根政善氏の証言を記載しておきたい。

…、石川の街頭をうろついている学童を見ると、スパスパ、タバコをすっているんです。レーション(米軍の野戦食)の中に入っているやつをすっているんですね。人々の服装をつけたり、つぎはぎのよれよれの服をまとって、夢遊病者のようにうろつきまわっている。はだしの者も多い。

いちばんショックだったのは、チリ捨て場にたかっている学童の群れを見たときでした。(中略) つぎつぎとトラックがチリを満載して運んで来て、放り捨てると、そのもうもうとけぶる黒煙の中に、袋をかついだ無数の小さな乞食の群れがたかっていくのです。“戦果”をあさっているんですね。みんなわれわれの国民学校の学童たちです。それを見たとき、これは放っておけないなあと思いました。名護へ行ってもそういう状態でした。あちらこちらに子供らの群れがうろついていました。

[仲宗根政善「米軍占領下の教育裏面史」、新崎盛暉編著『沖縄現代史への証言』下、沖縄タイムス社、1982年、p.182.]

(ちなみに、引用者自身もまたその「小さな乞食」の群れの一人で、“戦果”にもかかわった。拙稿、「思い出」、記念誌部編、『創立百周年記念誌 名護市立真喜屋小学校』、うらわ印刷、1996年、p.234.)

26) 山内氏のその他の証言によれば、『私のことだった理由は、私が子供の教育者であっても、子供の管理者ではない、というにある。アーレンはさすが社長さんだけあってもわかりがよく、すべてをまかせると率直だった。(中略) 教育とは、自分たちの子供を自分たちで育てることです。先生の数も少しずつふえて行った。アーレン大尉が一切干渉しなかったのはさすがだった、…』[榊原、「前掲書」p.36.]という。

27) 曾根、「前掲書」、p.41.

28) 「非職業軍人」に関連して「製粉会社の社長」[榊原、「前掲書」、p.36.] だったとも言われるが、アーレン大尉の経歴等の詳細は目下のところ不明で調査中である。他に、大内、「前掲論文」(pp.292-294.) なども参照されたし。

29) 『琉球史料』第 3集、p.30.

30) 曾根、「前掲書」、p.42. 当時、しばらくの間、いろはで表示がしてあり、「石川学園」は、「は」通りと「に」通りだったという。[伊波信光、「城前小学校沿革余話」記念誌編集委員会編、『創立35周年記念誌 石川市立城前小学校』、昭和55年、p.27.

31) 伊波、「同頁」。なお、伊波がこの開校当時の敷地を「仮敷地」と称し、後に示す記念碑もここに建立すべきだと述べていることに留意したい。p.26. 参照。

32) 山内、「思い出」、p.15. 文中、230名は2、30名の意か。

33) Fisch Jr. op.cit., p.97.

34) 『石川市史』、p.375. ハンナ氏 (Willard Anderson Hanna) については、『石川学園』との関わりでは余り扱べき資料がなく明確ではないものの、当時の沖縄の教育・文化面に対する関心と保護育成への努力に極めて多大なものがあることは周知のとおりである。Ohio State University で1937

年に M.A. University of Michigan で1940年に Ph. D. の学位を取得した。主専攻は "English" であるが、コロラド州のボルダーでは米海軍日本語学校に、コロンビア大学では海軍軍政管理学校にも参加している。また、中国や Michigan State Normal College と University of Michigan などでも教えてきた。[『ワトキンス文書』第94巻、p.41. 参照。]

なお、沖縄での活躍状況の証言等については、平良研一、「占領初期沖縄における社会教育」戦後沖縄社会教育研究会編、『沖縄社会教育史料』第3集、1979年3月、pp.80-82. 宮城悦二郎、「沖縄統治の顔——その近況をたずねて」『沖縄タイムス』、1985年1月4～7日付、さらに大内、「前掲論文」の豊富な聞き取り調査にもとづくハンナ関係の論述を参照されたし。

35) 『琉球史料』第3集、p.30.

36) 学園発足時は、「文字通りの青空学校だった」、榊原、「前掲書」、p.37. また、「焼け跡の空き屋敷をならして子供たちを集めた。と言っても、テント一つ張ってあるのでもない。全くの青空学校である」[曾根、「前掲誌」、p.43.] などの証言があることに留意しておきたい。

37) 『琉球史料』第3集、p.30.

38) 山内、「思い出」、『前掲誌』pp.14-15.

39) 石川市長はじめ民間側の参列もあったと思われるが、この日の『日誌』には記載されていない。

40) 『琉球史料』第3集、p.31.

41) しかし、高学年とはいえ、時間表に配置された授業科目が十全に実施されたか否かは不詳である。高学年になればなるほど、「作業」活動も増えたと考えられるからである。

42) 『琉球史料』第3集、p.31.

43) 「在籍」としたが、むしろ出席者とみた方がよい場合が多い。いずれにせよ、まさに戦闘中なるが故に、教師による実数の把握も困難であったと考えられる。

44) 曾根、「前掲誌」、p.45.

45) 山内、「思い出」、『前掲誌』p.15.

46) 「戦後教育発祥之地」の碑銘より。なお、この記念碑のデザインを担当したのは元琉球大学教授の故安谷屋正義氏である。ちなみに、安谷屋氏による記念碑のデザインの構想をここに掲げておきたい。

先ず、台の形は校舎の象徴です。そそり立つ自然石は郷土愛を、そして中に、はめこまれた真白い大理石は、知、自然石は、情、方形の台は、意、と、人間にとって必要な、三つの能力の象徴でもあります。知、情、意、のバランスのとれた人間を創り上げることが、学校教育、とくに、義務教育の理想ではないかと考えまして、三つの素材を組み合わせた訳であります。

として、氏は次の第2次計画も予定していたが、その着工をみないまま、不慮の事故により惜しくも1967年に他界された。「城前小学校が創立された頃、紙もノートもない中で、子供達が砂に字を書いて勉強したというあの姿を、彫刻の群像として配したら、もっと親しみのある記念碑となることだろう、、、」と。[安谷屋正義、「戦後沖縄発祥の地記念碑」の設計に当たって』『しろまえ20年記念誌』、pp.12-13.

47) 翌1946年2月公布された例の通牒（文教時報第1号）には、「修身科ニツイテハ日本国民ノ偉大ナル使命ヲ強調シタル戦前ノ如キ取扱ヒヤ軍人戦争等ヲ謳歌スル教育ハ許可サレマセンガ行儀作法ヤ生活指導ノ如キコトハ大ニ望マシイコトデアリマス」と規定されるに至った。

48) 新崎、「前掲書」、p.188.

49) 曾根、「前掲誌」、p.43. 『日誌』にも散見されるが、判読しがたい。

50) 「同誌」、p.45.

51) 同頁。

52) 山内、「しろまえ」、『前掲誌』、p.15.

- 53) 『琉球史料』第3集、p.11.
- 54) 8月5日という時点において、「少年団」とのかかわりで「標準語励行」が強調されていることは注目すべきで、なお今後検討したい問題の一つである。
- 55) 曾根、「前掲誌」、p.45. なお、『記録簿』では、たとえば、「教育法ノ厳守式ヲヤメルコト」（8月20日）の文言を確認している。
- 56) 曾根、「同誌」、p.45. この点、榊原氏の聴き取りと若干の相違をみせている。榊原氏の山内氏に対する調査によれば、「教育とは、自分たちの子供は自分たちで育てることです。先生の数も少しずつふえて行った。アーレン大尉が一切干渉しなかったのはさすがだった。だが、元気のいい先生がいて、子供たちを号令一下、一条乱れず動かしていた。これを遠くから双眼鏡で監視していたMPが文句をつけつけてきた。さすがのアーレンもこれには弱ったらしくて、『これはやめてくれ』といってきた。」〔榊原、「前掲書」、p.36-37.〕という。ここで、直接、山内氏に中止を申し込んだのは、本文引証のMPというよりアレン大尉ということになり、依然、検証の余地をのこしている。
- 57) 『琉球史料』第3集、p.11.
- 58) 本土の戦後の指令にも「少年団」は取りあげられているが、戦前の「大日本青少年団」に対して鋭く批判されていることは勿論である。すなわち、後者とは別の、郷土を基盤とした自然的な青少年団設置させることにしたといわれる。〔文部省、『学制八十年史』、昭和29年、p.489. 参照。〕1945年8月28日公布の「新日本建設ノ教育方針」を契機として登場する。いわゆる「新生青少年団体」がそれである。その少年団の内容、性格等と石川学園で早くも発足した「少年団」の場合との比較検討についても筆者の興味ある研究課題の一つである。なお、本土の敗戦直後における青少年団の動向については、日本青年館編、『大日本青少年団史』、日本製版、昭和45年、pp.913-921. 参照。
- 59) 『琉球史料』第3集、p.30.
- 60) 曾根、「前掲誌」、pp.42-43.
- 61) 「同誌」、p.43.
- 62) ちなみに、筆者の使用したこの期の残存『記録簿』のコピーは短期間のものなので、断片的な状態であり、その点、かなり、長期にわたって記述された『日誌』とは異なり、すでに見てきたように補完的な意義はあるものの、やはり、大きな制約を持っていることは否定できない。
- 63) 喜和初枝、「二十周年を迎えて」、「しろまえ」『前掲誌』、p.21.